



やさしさについて～林 竹二先生の授業から～

校長 田中 俊光

今回の校長室だよりでは、灰谷健次郎の本「わたしの出会った子どもたち」から、林 竹二先生が宮城教育大学の学長時代に、大阪府の守口市立梶小学校6年3組でやられた授業「やさしさについて」の場面を紹介します。

いまから、東京の動物園でおこったことを話すから、その出来事の中でやさしさというものを考えてみてください。5年生になると理科の授業でニワトリの卵からひなをかえす実験をしますね。いのちの誕生のしくみを学ぶわけなんだけど、ある学校でそういう学習をした。生まれてきたひなは、はじめ学級で飼っていたんだけど、だんだん大きくなって世話がたいへんになった。そこで、そのひなを動物園に持って行って、飼育係のおじさんに引き取ってくださいと頼んだんだね。

小さいうちはペットにして、大きくなって手に負えなくなると動物園に持ってくる、そういう人間の得手勝手さ、無責任さをしばしばあじわわされている飼育係のおじさんは怒っていったんだ。「学校というところは、いのちの生まれてくるまでのことは勉強しても、生まれてきたいのちそのものを大切にするという勉強はやらないところなのかね。みなさんに正直に話しておくけれど、こうして持ちこまれたニワトリなどは、生きた動物しか食べない爬虫類のエサにされてしまうんだよ。それでもいいかね」

これは子どもたちにいったというより、つき添ってきた先生にいったんでしょうね。子どもたちはショックを受けて、泣き出す女の子も出る始末になった。さて、みなさんはこの動物園のおじさんのとった処置をどう思いますか。

つぎは神戸の動物園の話です。みなさんも知っていると思うけれど、世界で最初にチンパンジーの人工飼育に成功した亀井一成さんから聞いた話です。先ほど爬虫類は生きたエサしか食べないといったけれど、それは神戸の動物園でも同じことで、ヘビやワニにはエサとして生きた動物を与えるんですね。しかたがないというもののそういう残酷な場面を見学者に見せるわけにはいかないので閉園してからエサを与えます。ときどき食べ残すことがあるので、よく日、開園前に見回って食べ残していればそれを回収するわけです。

あるとき、ひとりの女の子が半泣きになって「インドニシキヘビの檻に兎が一匹いて震えているの。おじさん助けてあげて」と駆けこんできた。亀井さんはしまったと思ったそうです。ちょうどその日、ほかの仕事に気を取られていて、見回りを忘れていたんですね。亀井さんは檻の中にはいつか兎を救出しようとしたのですが、動物は自分のエサを横取りする者を襲う習性があるでしょう、亀井さんを襲ったわけです。手に牙を立てられながら、かろうじて兎を救出したんだけど、亀井さんは負傷してしまうんですね。さあ、どうですか。亀井さんの行動をみなさんはどう思いますか。

(「わたしの出会った子どもたち」灰谷健次郎 新潮文庫)

3つの幸せ、ゼロから一へ～かぎやま ひでさぶろう鍵山 秀三郎～

「幸せには3つある」と言った人がいます。それは、カー用品販売会社イエローハットの創業者であるかぎやまひでさぶろう鍵山秀三郎さんです。「3つの幸せ」とは、まず「もらう幸せ」、次に「できる幸せ」、最後に「あげる幸せ」です。一番価値ある幸せは「あげる幸せ」だと、かぎやま鍵山さんは言います。

まず、「**もらう幸せ**」について。これは、誰かに何かをしてもらう幸せです。生徒にとって、家族の人に弁当を作ってもらい、ユニフォームを洗濯してもらい、**この幸せは、一時的なもので終わってしまいます**。次に、「**できる幸せ**」です。これは、今までできなかったことが、自分で何かをできるようになる幸せです。生徒にとって、速く走ることができるようになる、連立方程式の問題を解けるようになる。できるようになることは、とてもうれしいことですが、この幸せは自分一人の幸せにとどまり、**他人の幸せにはなかなか結びつきません**。最後に、「**あげる幸せ**」です。人のために自分の時間を使い、汗を流す。生徒にとって、お年寄りの重い荷物を持つ、部活動で悩んでいる友達の相談にのる。これらは、いずれも「自分が人の役に立っている」と実感したときに味わう幸せです。他人のために何かをしてあげることが、一見すると、自分は損をしているかのように見えるかもしれませんが、**誰かの喜ぶ顔を見る幸せ、誰かに必要とされる喜びは、最高の幸せ**だと思います。

続いて、かぎやまひでさぶろう鍵山秀三郎さんが書かれた「ゼロから一へ」を紹介します。

「ゼロから一へ」

NPO法人日本を美しくする会相談役 かぎやまひでさぶろう 鍵山 秀三郎

最初の一步は、とても難しいことです。ユダヤの格言に「**ゼロから一への距離は、一から千までの距離より大きい**」というのがあります。ゼロから一はわずかなように見えますが、**何もしないところから一步踏み出すのは大変な勇気が要る**ことを言っています。一方、踏み出してしまえば後は進むのが非常に早いです。何もないところからでも、良いと思ったことは勇気を持って一步を踏み出してください。一步踏み出したら、今度はそれを続けるエネルギーを絶えず自分の中に見出していく。そうしますと、百に至り、五百に至り、千に至る。

ある本の中で名優、いちかわ だんじゅうろう市川 團十郎がそのことを書いていました。ある停留場に行ったとき、大きな貨物が荷物をいっぱい積んで止まっているのを大勢で押していた。動き出した後は一人で押していた。それを見ていただんじゅうろう團十郎が弟子に「ほらあれを見ろ、最初やるときはたくさん力が要るんだ。しかし動き出せばあんな重いものだって一人で動かせるんじゃないか」と教えたところがありました。このように、最初に物事を踏み出すのは勇気も要るし、エネルギーも要るし、もしもこれをやって失敗したらどうしようと思ってしまうね。そう思うとちゅうちよ躊躇してしまっ、良いと思いつつもやらないで終わってしまうことがよくあります。

さて、ここからがとても大切なところです。**確かに何もしない人は失敗しない。しかし、何もしないという失敗ほど大きな失敗はない**のです。私は人生で何も失敗しなかった。だから私は良かったという人がいますが、それは何もしなかったという証明なんです。何かをすれば必ず自分の未熟さ、あるいは自分が下手であること、力のなさ、あらゆることを思い知らされ、人からも非難されるし、いろんな目にあ遭い、こんなことをしなきゃよかったと後悔するんですね。しかし、何かをやって失敗した後悔は、必ず後になるにつれて小さくなり、いつの間にか消えてなくなります。ところが、何もせずに後になって、あの時どうしてやらなかったのか？やっておけばよかったという後悔は、いつまでも自分を苦しめて長引くものなんです。何かをやれば失敗もある、人から非難される、ちようしやう嘲笑される。そのことが自分をきた鍛えていく元だと思います。